



エセルとジュリアス

レオン・クルチコフスキー／中本信幸訳

ローゼンバーグ事件、
最後の六時間

未来社

エセルとジュリアス

ローゼンバーグ事件、最後の六時間

レオン・クルチコフスキー

中本 信幸 訳



未来社

訳者略歴

中本 信幸(なかもと のふゆき)

1932年生まれ

東京外国語大学ロシア語科卒。

ロシア文学・演劇専攻。現神奈川大学教授

著書に『チェーホフのなかの日本』(大和書房)

訳書にモローゾフ『シェイクスピア研究』、『エイ

ゼンシュテイン映画演出法講義』、クルチコフスキ

ー『自由の最初の日』(以上未来社)、『チェーホフニ

クニノペル 往復書簡(1)』共訳(麦秋社)等

エセルとジュリアス

——ローゼンハーク事件、最後の六時間 定価 1200円

1985年6月1日 第一刷発行

訳者 中本 信幸

発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川 3-7-2 〒112

電話(03)814-5521 振替東京7-87385

本文印刷／モリモト印刷 製本／五十嵐製本

乱丁・落丁本はおとりかえます。

エセルとジュリアス

——ローゼンバーグ事件、最後の六時間

目次

エセルとジュリアス	三
-----------	---

あとかき	一三五
ローゼンハーグ事件関連年表	一四四
上演記録	一四八

作者から

わたしは、一九五〇年夏に始まり、一九五三年六月十九日に終わる（この「事件」が終わったものと考えられるならば）諸事件の連鎖としてローセンハーク事件を示すつもりはなかった。この戦慄すべきトラマの政治的、人間的諸事件を、ニューリアスとエセルの最後の数時間に絞りこんで描こうとしてみた。このために、劇作家としての行動の自由は極度にせはめられた。最後の数時間の現実の流れから、わすかはかりの、本質的でない逸脱をおかさざるをえなくなった。この場合に、わたしは作品の構成上の要求に従って、事実関係の正確さを犠牲にせざるをえなくなったか、いうまでもなく、その本質的なものには変更を加えていない。

登場人物

ノユリアス

エセル

弁護人

検事

裁判官

刑務所長

女看守

ノエノー

テーウィト・クリーンクラス

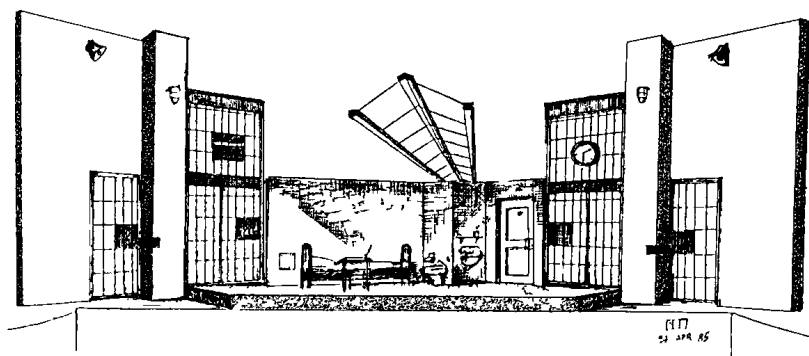
修理工

マイケル

ロハート

看守たち

舞台は一九五三年六月十九日、
ニューヨーク近郊のノンノン刑務所



第一景

／＼／＼刑務所、死刑囚拘置所。監房の内部。後方の壁に扉。上手の壁のそはにへ／＼ト（板張りへ／＼ト）。中央に本や書類の置かれた小テーブル、ランプの下に背のない椅子。

“第四の壁”には、つまり、幕には、上から垂れ下った鉄格子のはまった窓ひとつ。

エセルが凍え切った様子で、へ／＼トの隅で身をここめている。居眠りしているようだ。しばらくして、錠の鍵をまわす音。扉が大きく開き、戸口に女看守。彼女は、ゆつくりと目を開くエセルを見守る。女看守のつしろから、修理工があらわれる。電話器をのせた小テーブルをもち、その細い電線か床にのひている。かれはエセルのほっぺに目をくれす、戸口に近い壁きわにテーブルを置き、電線を敷居の隅に取りつけ、廊下に立ち去り、やかて戻ってきて、受話器をもってくる。

修理工（小声で）ハロー、ガウエイか？……うん、おれた。よく聞こえる、たけと、なんたい、そ

の声は、そつとさせられるせ。（耳を傾け、間を置いて）オーケー、いい調子だ、これでなんとかい

い具合にいいいいたか。

女看守

(修理工に) みてくれた？　みてくれたら、出ていってください。

修理工は受話器を置くと、誰にも目をくれずに足早に出て行く。

エセル

(ヘノトから離れ、電話器のそばに立ち、電話器を見つめる) これ、なんてす？　なんのため？

女看守

わかりません。いま、検事さんかきて、説明してくれます。(微笑する) ゆうへはよくおやす

みになれて、ミセス・エセル？

エセル

とうして、そんなこと知りたいのです？

女看守

(胸の底を打ち明けるように) ノヤーナリストたちかそんなこと、わたしに聞くんです。今朝か

ら事務所につめかけ、みんなとても興奮していて……

エセル

(おうむ返しに) 今朝から？

女看守

十二時まえ、わたし仕事に出るまえからよ……(廊下に足音) あら、もう検事さんか。(去る)

検事

(監房のところまで入り、素早く電話器を見やり、それからエセルを眺め、扉を閉める) 申し訳けあ

りません、ええ……残念ながら……わたしは申し上げられないのです、グノト・アフタヌーン

とはね……

エセル　（支えを探すかのように、両手をうしろに廻して）ということは、悪い知らせをお持ちになったのね？

検事　そうですね。最高裁判所は原判決を再確認しましたし、大統領閣下もあなたとご主人が出された特赦請願を棄却しました。三十分まえに決まったのですか。（書類を一枚取り出す）ここにホワイト・ハウスからの電文か……

エセル　いいえ、それにはおよびません……

検事　では、ご勝手に。（微笑しなから）ご主人は、聞きたいとおっしゃいましたか。もう一度、読んでもらいたい様子でした……（書類をしまつて）では、お知らせしなければなりませんか、今夜八時、刑か執行されます……

エセル、身しろぎしないて、目を閉じる。

検事　というわけで、今度こそ最後の最後、これからはしまる六時間は、あなたの生涯の最後の六時間です。

エセル　（目を閉じたまま）検事さん、わたしも、わたしの主人も、この二年間、死んでいたようなものですね、毎日。

検事 まあ、それはそんな風に言いますか、ミセス・エセル、それは真実かも知れませんか、やはり、いよいよその瞬間か近つくと……生きてるうちに電気椅子に座れるのは、一度たけてすからね。

エセル （目を開ける）最後に……主人にひとめ会えるてしょうか？

検事 大丈夫、かならず。（語気を強めて）わたしともは、法律で定められている以上に、多くの時間と自由な条件を、あなたかたに提供するつもりです。

エセル こ好意には感謝しますわ。

検事 いま思つていらつしやる以上に、感謝してたたけるといいのですか。わたしは率直に申し上げます。あなたかこ主人と——ふたりたけて——最後にかわす会話に、わたしたちは非常に大きな期待をかけているのですか。

エセル わたしたちの最後の会話は、わたしたちふたり以外の誰にも興味かないと思います。検事さん、ましてあなたには……

検事 多分、そうかも知れません。たか、……もしかすると、そうでないかも知れません。たかし、この点は、わたしの一存ではとつにもならん、ミセス・エセル。高い地位にある人たちか、これからしきにこの監房でかわされる会話に、非常に大きな意味を認めています。

エセル （危に警戒して）わかりません。なにをおっしゃりたいのです？

検 事 おおありてすよ！（電話に近づき、片手を受話器にかける）さあ、この受話器をこらんなさい。

エセルは、沈黙したまま、長いこと受話器を見つめる。

検 事 これは普通の電話ではない。生き物たと思つてくたさい。もつと言えは、友人たと思つてく

たさい。ああ、こうして受話器をはすし、ほんの二言三言、言いさすれば、もつ充分……

エセル わかりませんわ。誰か受話器を取らなければいけないんです？

検 事 あなたでも、あなたのこ主人でも、となたてもかまいません。繰り返しますか、ほんの二言三言、おっしゃるだけでもう充分です。すぐに返事の声か聞こえます——あなたかたの命を救う声か。はっきり言いますと、それはわたしの声です。権限を与えられているのです。

エセル （驚愕して）まあ！

検 事 わかつていたたけましたね。大変結構、簡単なことではないですか！（エセルに近づく）この電話器は晩の八時までここにある。つまり、あなたのこの戸口に死か訪れるときまでです。そつ、ミセス・エセル、死ですよ、あなたとあなたのこ主人をここから真直ぐに電気椅子に連れていく看守たちです。

エセル （つふやく）わかります……わかります……

検事

（エセルのすぐ傍に近つき）いいですか、よく聞いてください。この電話は、今日、刑務所本部に設置されたわたしの事務室につながっていますし、そこから司法省には直通電話があります。ノエントルマンとして保証致しますか、これから六時間、わたしは事務室を一步も出ません。ご承知のように、わたしとも司法官は時として、自分の囚人の囚人になる破目になる。

エセル

（厭味っぽく）わたしの件でしたら、すぐにも、あなたを自由にしてあげますわ。

検事

あなたの件だけではありません。思うに、ご主人のお考えもありましょうし……ミセス・エセル、これだけはお忘れないように。あなたがいま、なんとおっしゃろうと、夕方八時まで、わたしは事務室を離れないことにしました。まあ、いいです、なにも隠しませんよ。あなたがいま、なんとおっしゃろうと、わたしは六時間、事務室に釘つけになって、期待を抱いています、いまにきつと、この線てつながっている向こうの端の電話が鳴る瞬間かくるにちかない、と。もちろん、わたしかそんな言葉を待っているかは、あなたも、ご主人もご存しなのです。

エセル

（身ぶり、手ぶりで）検事さん、このテーブルにはわたしの母からの手紙があります。母はわたしが無実の罪に問われていることを知っています。たのに手紙をよこすたびに、毎回、わたしにせかむのです。身に覚えかないにせよ、無実であろうと、命さえ救えるのなら、その犯してもいない罪を自白してしまいなさい、と言うのです。

検事

まったくその通り。電気椅子からあなたを救えるのはそれだけです。ご主人についてもまっ

たく同してす。

エセル （あたかも検事の言葉が耳に入らなかつたかのように、ひとりことのように）あのひとのことは、母のことは、許せますわ。たつて、わたしの母は絶望にさいなまれ、愛情にひきずられているのですもの、絶望も愛情も人の目を見えなくさせます……あなた本気で考えていらつしやるのですか（電話を示す）、この電話のほつか、母の願いよりも強く、わたしを動かせるなんて？

検事 動かせましても、こ主人たつて動かせます。そして、こんとはこ主人のほつか、あなたに働きかけることになるでしょう。たたの物体たと思つて馬鹿になさると、とんでもないことになりますよ。命のない物体が、ときにはわたしたち生きている人間に予想外の影響を与えます。たとえば、犯罪人の大部分は、自分か盗みたいと思つた物体の犠牲者ではありませんか……まあ、哲学談義はほとほとにして、残された数百分のうちの、一分一分がかけかえかないのです……こ主人もしき、ここに見えます。

エセル （嬉しそうに）ノユリアスが……ここに……

検事 あなたかたには時間かたくさんある……まあ、比較的たくさん、ふたりで考えなおして決断をくだすには充分な時間です……

エセル （両の手の平をこめかみにあて、背を向けて離れ、ヘノドの端に座る。間を置いて）検事さん、こ存しと思ひますか、二週間前に司法省から特別のかたかここに来ました、ミスター・ヘネソトで

す。わたしと主人は二時間もそのかたと話しあいました……証人ぬきての話でしたか、多少はこ
存したと思います、ええ、正確にこ存しのはず、その内容かなんてあったかは？

検事 （取りつくろって）まあ、多少は……

工セル てしたら、わたしから正確にお話ししましょう。ヘノトさんはわたしたちに申し出られたの
です。政府に協力すればひきかえに特赦しよう、そうおっしゃったのです、「政府に協力」って。
わたしたちが同意すれば、ワノントンから係官たちをよこし、「しかるへき」話し合いをして、「し
かるへき」調書を作成させるといふんです……わたしたちがこの申し出をことわったことは、お
聞きてしょうね？

検事 聞いています。でも、あれは二週間前のことですから。

工セル この二週間のうちににも変わりました。

検事 わかりませんよ。この二週間、タクラス判事とその仲間の弁護士三人は最後の土壇場に最高
裁判所の決定をひっくりかえそうとやっきになりました。ご承知のとおり攪乱工作はたった八時
間でフイになりました。ですか、さらに重要だと思えるのは、ヘノトかあなたのところへ来た
のか、死刑執行日か公表された日のちようと翌日だったということです。あの人と話し合われた
ときには、あなたにはまたまるまる二週間の余裕がありましたか、いまになっては——いまにな
ってはもう六時間しか！